

SBJ

vol. 29

2014年8月22日発行

碩学舎ビジネス・ジャーナル
Sekigakusha Business Journal

第2回 碩学舎賞 二席

「『古楽』市場の生成過程における
音楽学研究と演奏実践の協働」

飯島 聡太郎

(一橋大学大学院 商学研究科)

第2回碩学舎賞 二席

「古楽」市場の生成過程における 音楽学研究と演奏実践の協働

一橋大学大学院 商学研究科

飯島 聡太郎

要旨

本稿の目的は、理論と実践という通常は異なる活動領域が、緊密に協働し、学問的知見が実践の世界へと迅速に流れるようになるという現象に対して、ひとつの理論的視座を提示することにある。具体的には、1970年代以降「古楽¹」を訴求する製品²・サービスが、わが国の西洋音楽業界³における一部の演奏家によって採用され、やがて「古楽」市場が生成されるに至った理由を、制度化プロセスとして解釈する作業を行う。異なる規範に従って知見を蓄積してきた理論と実践の2つの領域において局所的にみられた協働の場は、いかにして生まれ、存続するのであろうか。本稿では、理論と実践の緊密な結びつきの典型として、西洋音楽業界における特定の事例を取り上げ、理論と実践という異質な社会的世界がいかにして緊密な協働を開始し、そうした協働によって学問と実践がいかに変容するのかを考察する。

キーワード

消費研究、普及研究、事例分析

1. 本論文でいう古楽とは、主として18世紀以前の作品を演奏する際に、作曲家の構想や作曲当時の社会的状況、演奏習慣に忠実であろうとする、演奏上の考え方ないし演奏の方法を意味する。

2. 本論文では以下、特に断りがなくともサービスも含め「製品」と呼ぶ。

3. いわゆるクラシック音楽業界

I. 音楽学研究と演奏実践

音楽学者との付き合いは、ほぼ無いね⁴。

一番身近なのは楽理(科)の人ぐらいかな。でも、それほど話を詰めることもなかなか無いかな⁵。

理論と実践は別個の活動領域である。例えば哲学の領域では、アカデミズムの内部で抽象的な一般原理の探究を目指す研究者と、現実社会の具体的場面で生じている困難や問題に悩み、対応している一般市民という2者が存在し得よう。哲学的な思索を深めるには現実社会にあまり引っ張られない方がよいとか、あるいはその反対に、研究室で生まれた哲学理論は現実の人生の役には立たない、といった類の理論と実践の分離は、人々の生活のいたるところで見受けられる。

しかし、理論と実践が緊密に協働し、学問的研究成果が実践の世界へと迅速に流れる(沼上 1991) ことによって、双方、とりわけ実務家のアウトプットが変容し、消費者が刺激され、新しい受容が創出されるといった事例も存在する。新しい製品の生産・提供を検討する実践の世界の住人が、長らく溝があった理論の世界の住人と緊密な協働を行い、やがて需要を創出し、消費者の愛顧を受けるに至るのである。そのような需要創造の現象は、どのようにして起きるのか。そのようなプロセスはどのような理論的枠組みを通じて説明できるのか。これらが本稿の問題意識である。

西洋音楽業界では、19世紀に音楽学と呼ばれる学問領域が誕生して以来、音楽学研究と演奏実践は分離の様相を呈し、別個に発展を遂げるようになった。冒頭の言葉は、今日の演奏の現場で活躍する2名の演奏家によって語られたものである。演奏家と音楽学者の間の交流が、

極めて乏しいか、若しくは存在していないことが伺われる。しかし例外的に、西洋音楽業界のうち、とりわけ古楽と呼ばれるジャンルにおいては、理論と実践が緊密に結びつき、両者の相互作用によって優れた演奏方法が開発・提供され、それによって新たな需要が創出された事例が存在する。そのような事例の典型として、本稿では、オーケストラ・合唱団のバッハ・コレギウム・ジャパン⁶(以下、BCJと略記)を取り上げ、主に演奏という対市場行動に着目してこれらの問いを明らかにしていく。なぜならばBCJは、ヨハン・セバスチャン・バッハ⁷を中心とするバロック時代⁸の作曲家の作品に対して、古楽⁹(early music)という、学問的研究成果を伴う革新的な演奏上のアプローチを行った演奏団体として、「理論と実践の関係」に関心を寄せる研究者によって、取り上げられてきたからである。要するに本稿では、日本における古楽普及のパイオニア・立役者であるBCJの取り組みを事例として取り上げ、特に彼らがいかにして古楽の演奏そのものや、古楽という「音楽のあり方」を雄弁に消費者へと訴え、古楽ファンを生みだすに至ったかという点に着目して分析を行うのである。

II. 理論的枠組み

本稿では、新しい製品や製品のコンセプトが形成され、それが消費者にも認められていくという現象に対して、ひとつの理論的視座を提示することを目指す。本節では、先行研究の検討と事例研究を行う上での2つの概念枠組みについて確認する。これらの視角は新制度派組織理論の分析枠組みを援用したものである。

本稿に関心を寄せる第1の概念枠組みは、正当性¹⁰(legitimacy)である。正当性とは、「人々によって価値があるとされたものの性質に関する共有された信念」(Peterson 1997, 2004)である。本稿の事例は、古楽とい

4. 2012年11月22日 港区 ベルフォールカフェ 横溝耕一インタビュー

5. 2012年11月21日 新宿区 MOVECAFE 永澤菜若インタビュー

6. BCJは、オルガン・チェンバロ奏者であり指揮者の鈴木雅明が、世界の第一線で活躍する日本のオリジナル楽器のスペシャリストを擁して1990年に結成したオーケストラと合唱団である。特にJ.S.バッハを中心とするバロックの宗教作品を理想的に上演することを主旨としている。1995年にバッハ作曲『ヨハネ受難曲』でCDデビューして以来70点を超えるCDをリリースし、特にバッハ作曲『カンタータ全曲レコーディング』は、「世紀の大プロジェクト」として国内はもとより海外でも高い評価を得ている。同シリーズは、英BBC Music誌(創刊10周年記念号)で、《Top 10 Disc of the Decade》のひとつに選ばれ「文化のグローバル化の尊敬すべき、もっとも創造的な例」と評されている。BCJの創業者・音楽監督である鈴木雅明は2012年、「バッハメダル」

を日本人で初めて受賞した。これはバッハが音楽活動の拠点としていたドイツ東部の都市、ライプツィヒ市がバッハの作品の世界的な普及に貢献した音楽家に2003年から毎年贈っているものである。鈴木氏の受賞理由についてライプツィヒ市は「長年にわたるバッハ作品の演奏で、日本をはじめアジア全体に作品の本質を広めるのに貢献した」としている。BCJホームページ http://www.bach.co.jp/japanese_page_top.htm

7. 音楽学及び西洋音楽史上の重要性や今日における演奏の頻度の多さ等から、バッハは古楽が主たる対象とする17・18世紀の作曲家のうち最大の作曲家のひとりとみなされている。

8. 音楽学における時代区分としてのバロック時代は、1600年から1750年頃と考えられることが多い。

9. 本論文でいう古楽とは、主として18世紀以前の作品を演奏する際に、作曲家の構想や作曲当時の社会的状況、演奏習慣に忠実であろうとする、演奏上の考え方ないし演奏の方法を意味する。

う新しい製品の魅力が業界関係者から消費者へと訴求された結果、例えば「古楽は素晴らしい」、「バッハの作品は古楽で聴く方が、作品の雰囲気が高く味わえて良い」、「モダンよりも古楽の演奏会に行くべきだ」等の、「古楽には価値がある」という信念が業界関係者から消費者へと共有された現象とみることができる。つまり、業界関係者との相互行為によって古楽の正当性が形成され、消費者へと波及したわけである。本稿では「人々によって価値があるとされたものの性質に関する共有された信念」として正当性を捉え、何らかのものに対する信念が多様な人々や組織の間で繰り広げられるやりとりの中で定義されていく、と考えるわけである(Peterson 1997, 2004)。

それでは、こうして古楽の需要が創出されるに至る一連の流れは、どのように理解されるべきであろうか。それに関するものが、第2の概念枠組みである「制度化プロセス」(institutional process)である。佐藤(1999)によれば、新制度派組織理論がいう制度(institution)¹¹とは、「法律や慣習といったように社会行動に定型性・規則性、安定性・持続性を与えるものによって根拠を与えられ、ある程度の正当性を認められて自明視されるようになった社会的行動のパターン」のことであり、その例としては、友人関係などが挙げられる。古楽のファンが出現するという事はつまり、売り手と買い手の持続的な関係が成立することであるから、本研究の事例は制度化プロセスとして理解することができるのである(Suchnan 1995; Strang and Mayer 1993; 大竹 2012)。

また、古楽演奏家が演奏活動を開始し、やがて古楽を愛顧するファンが出現するに至る一連の流れは、古楽の普及とみることもできよう。既存の流行研究や普及研究では、潜在的な受容者(受け手)により何らかの新奇性を備えていると知覚され、ある程度の規模の人に受容されると流行や普及という集合現象として現れるものごとを総称

して、「イノベーション」(Rogers 1971)と呼んでいる。イノベーションは必ずしもモノであるとは限らず、音楽や言葉を含む幅広い意味での思想も含まれる(北村 2008)。また、Humphreys(2010)は、「新しい産業が出現、存続していくプロセスは複雑な社会・政治的文脈において理解される」とし、Kotler(1986)の「メガマーケティング(megamarketing)¹²」と呼ばれる概念を援用しながら、理論構築を行っている。米国におけるカジノ産業の事例を取り上げ、新しい産業が正当化(legitimation)を経て、消費者に採用・容認される過程を描き出した同論文では、普及は制度化プロセスであると述べられている。

以上2つの概念枠組みは、次のようにまとめることができる。すなわち、古楽演奏家や音楽学研究者といった業界関係者によって構築された古楽という製品の正当性が、消費者へ共有され、古楽という音楽上の考え方が自明視されるに至る過程は、制度化プロセスとして理解することができるのである。以下では、理論と実践の協働の典型として、BCJが取り組むバッハの教会カンタータ¹³全曲演奏の事例¹⁴を挙げ、2つの異質な社会的世界の接点においていかなる相互作用がみられたのかについて述べる。すなわち、古楽という演奏上のコンセプトを採用した演奏家が登場する直前の状況が述べられ、その後学問と実践の協働の典型としてBCJによる演奏活動の事例が取り上げられる。さらに古楽ファンの出現を確認し、理論と実践の世界の住人のアウトプットがいかに変容したかについて述べる。

III. 音楽学研究と演奏実践の協働

本節では、演奏家と研究者がそれぞれに生み出す知見が、如何なる経路で共有されていくのかについて述べる。図1には、理論と実践の世界の多様な主体の相互行為が複雑に相互依存しあっていることが、若干整理されて描

10. 本論文では、主として新制度派組織理論の領域で用いられているlegitimacyを正当性と表記する。正当性は、音楽学、とりわけ古楽の領域で用いられる「作品が作曲された当時の演奏習慣の完全な再現」を意味する正統性、ないし真純性authenticityとは明確に異なる概念である。

11. 佐藤(1999)によれば、通常、制度という言葉には次の3つの語義が含まれるという。すなわち、(1) 定型性・規則性、安定性・持続性をもち、ある程度の正当性を認められて自明のものとなった社会的行動のパターン(例: 友人関係など)、(2) 社会行動に定型性・規則性、安定性・持続性を与えるもの(例: 法律、慣習、ルール、もの見方など)、(3) (2)によって根拠を与えられ、(1)を実現する手段や場(例: 組織、機関など)であり、新制度派組織理論がいう制度とは、(2)によって支えられている(1)を意味するという。

12. 「メガマーケティング」とは、特定の事業に参入し事業を展開するため、経済的スキル、心理的スキル、政治的スキル、パ

ブリック・リレーションズ・スキルを戦略的に調整して、多くの当事者の協力を得るマーケティング手法である(Kotler 1986)。

13. カンタータとは、キリスト教ルター派の典礼の音楽の一種である。バッハはカンタータを約300曲作曲したといわれ、そのうち200曲余りが現存している。ライブツィヒ・バッハ・アルヒーフ所長のヴォルフによれば、カンタータはバッハの「中心的な作品」である。BCJは1995年に全曲演奏シリーズを開始し、完結は2013年を予定している。既に50枚余りのCDが刊行されている。

14. バッハのカンタータを全て演奏した演奏家は非常に数少ない(リリング(1984年完結)やアーノンケール/レオンハルト(1989年完結)など)。長期に及ぶ全曲演奏を達成すること自体が、バッハ演奏の大家でなければ為し得ない壮大な取り組みといえる。

かれています。

図1には濃度の異なる網掛けが施されており、国内の消費者から「離れていく」のに従って網掛けを濃くしてある。一番右端の比較的薄い網掛けの部分には、BCJの対市場行動に関連する項目が並んでいる。BCJが古楽の最終市場において消費者に古楽演奏を提供したことが描かれているわけである。経営学で通常みられる議論は、この組織内の意思決定プロセスや、組織と環境との相互作用に集中しているように思われる。しかし沼上(2000)によれば、むしろこの直接的な相互作用を行う環境部分は、実はより「遠い」環境部分と因果的に連結しており、一見「遠い」所で生じているような事態が、意図を持った行為主体間の相互作用・相互依存関係を経て、回り回って企業を取り巻く環境を変化させているとみることができるのである。本節では、最終市場からは一見「離れた」社会的世界のあいだにみられた相互行為を確認することで、BCJがいかにして演奏上の共通の見解を見出していかについて述べる。

モダンの行き詰まりと第2世代の出現

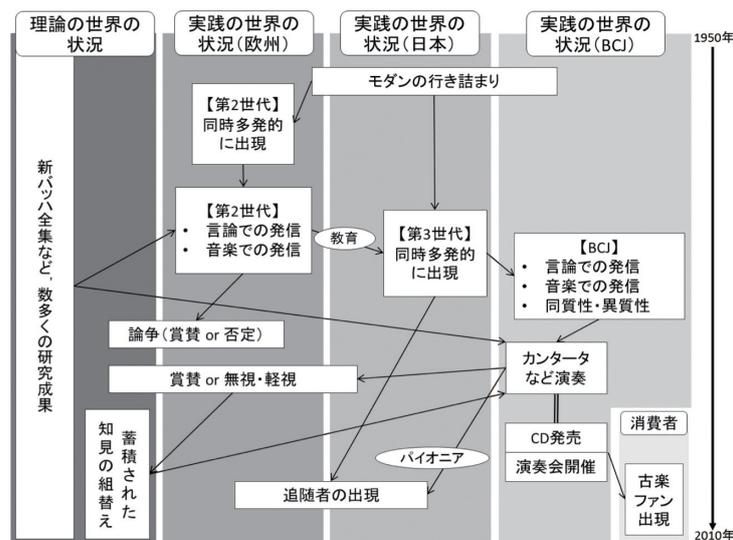
19世紀半ばに確立したモダン演奏は、20世紀の半ばに差し掛かり、行き詰まりを見せるに至った。モダン演奏は本来的に、演奏者の感性に強く依存する性質を持つ。古楽が作品の創造者たる作曲家の楽想に忠実であろうとするのとは対照的に、モダン演奏では、演奏家によって元の作品に演奏家自身のオリジナリティが付加されることが当然視されていたわけである。こうした演奏家本位のスタイ

ルは、一部の演奏家や研究者、音楽ファンから「バッハをはじめとするバロック時代の作品にはそぐわないのではないか」という意味で疑いの目を向けられつつあった。モダンへの疑問が彼らを中心に広がり始めたのである。こうした時期に、バッハなどの音楽の本来の素晴らしさを信じ、その魅力を本格的に普及させようと試みる演奏家群が出現した。それが1960年代のヨーロッパに現れた、アーノンクールやレオンハルトらを中心とする古楽の第2世代である(アーノンクール 2006; メルトル 2006; 寺西 2000; ハスケル 1992)。彼らが既存のモダン演奏家と大きく異なったのは、音楽学研究成果を十分に取り入れた演奏を志向したことにある。古楽演奏家にとっての芸術的理想は、研究成果無くして追求し得るものではなかったのである。

第3世代の出現

モダン演奏に問題意識を感じていた演奏家は、日本にも存在した。それが1950・60年代生まれの、古楽の第3世代である。桐朋学園大学や東京藝術大学を経て、オランダ・ベルギーといった古楽先進国で第2世代の薫陶を受けた後に帰国した彼らは、1980年代にBCJを立ち上げ、演奏活動を展開する。第2世代と同様に、第3世代も極めて高い演奏技術と音楽学の成果にアクセスする指向性を持っていた¹⁵。彼らは音楽学上重要とされるバッハの作品を網羅的に演奏しており、その中でも彼らの仕事を象徴するのが、カンタータの全曲演奏である。

図1 理論と実践の相互作用を記述する試み



[出所] 沼上幹著『行為の経営学』を参照し筆者が作成

15. 例えば、鈴木雅明の著作『わが魂の安息、おおバッハよ!』や『バッハからの贈りもの』、BCJの演奏会のライナーノーツでは、多数の音楽学研究成果がレビューされている。

音楽創りにみる、協働の場としてのバッハ・コレギウム・ジャパン

カンタータ全曲演奏におけるBCJの取り組みをみると、BCJの音楽づくりが他の演奏団体のそれにはない特質を持っていることがわかる。その典型が、40年に及ぶ長い年月を共に過ごし得たほどに「気の合う」仲間の存在を土台とした、周到な摺り合わせである。そして、それらを可能にしたのは、BCJの独特の人間関係であると考えられる。規模の大きな音楽団体の内部では、例えば指揮者とオーケストラ、管楽器と弦楽器、金管楽器と木管楽器といったセクションのあいだにヒエラルキーがあるが、40年にも渡って演奏家の数が限られていたBCJでは、こうした序列がそもそも成立しなかった。BCJの創設者で指揮者の鈴木雅明は著書のなかで、BCJの音楽づくりの場で行われているディスカッションを簡潔に描写している¹⁶。

僕がここをこうしようよ、とみんなに説明する。すると、「何で?」とか言い返してくるわけです。そこで話し合っ、こちらは説得にかかる。理解が得られなければ、僕の方が譲歩する。

それでは、前述のように分離していた理論と実践の2つの世界のあいだで、いかにして知見が流れるようになったのだろうか。次節ではそのような状況の生成に注目して記述する。

(1) 音楽学研究と演奏実践の協働

古楽というコンセプトが演奏の現場で具現化されていく一方で、学問の世界で生まれた研究成果の大半は、ある種の機が熟するのを長年にわたって待ち受けており、蓄積された知見が実践に移されるまでには、非常に時間がかかるのである(沼上 1991)。もし「日の目を見る」きっかけがなければ、そのような成果はただ蓄積し続けただけかもしれない。それでは、そうしたきっかけとはどのようなものだろうか。また、常によりよい演奏を模索している実務家と、知見を集積しながらも実践の場に提供する機会がなかった研究者との間に、いかにして知見が流れるような協働の機会が出現したのだろうか。本節では、これらのことについて記述する。

「音でモノを言う力」と「言葉でモノを言う力」の構築

BCJの組織内部では、「音楽学者に勝るとも劣らない水準で」音楽上の議論が交わされていたと推察される。

それを可能にしたのは、BCJの中核を構成したメンバーの性質にある。例えばバッハ研究者の磯山雅は、音楽監督の鈴木雅明について以下のように述べる。

非常に優秀な頭脳の方で、並みの研究者が追い付かないほどの研究的な素質を持っている方だから、彼の主導で行われるBCJの演奏は、それなりに学問的性格を帯びていることは確かだと思いますね¹⁷。

鈴木秀美や若松夏美、高田あずみ、寺神戸といったBCJの根幹をなすメンバーのいずれもが、学生時代以来40年に及ぶ活発な意見交換を経験している¹⁸ことから、極めて深い知見と高いコミュニケーション能力を備えていた推察される。つまり、BCJの音楽づくりにおいては、極めて高い水準のディスカッションが繰り返されたと考えられるのである。鈴木秀美が「ステージに上がる人間は、演奏したことについて議論する用意があるべき」と語るように、演奏の質というものは熟考・熟議を尽くすことに決定的に依存するという認識がBCJ内部で強くもたれたことは、摺り合わせを周到に行うことに対するメンバーのコミットメントが高かったことを意味する。そして、それを支えたりソースこそが、各メンバーの高い演奏能力、すなわち「音でモノを言う力」と周到な摺り合わせの準備、すなわち「言葉でモノを言う力」の2つであったと推察される。その意味では、特定のメンバーが志向したことで正当な演奏の仕方が開発されたわけではなく、偶発的にそのようなメンバーが揃った上で、念入りの摺り合わせを行ったことこそが、より望ましい演奏方法の探求、すなわち彼らの演奏の正当化に繋がったのである。例えば、何らかの演奏上の問題意識が共有された場合には、研究者や研究者が書いた文献へアクセスする、若しくはメンバーが既に持ち合わせている知識の範囲内で議論を重ねる、といった指向性が生まれるわけである。

異質な2つの世界がそれぞれに持っていた独自の規範

ただし、学問と実践の協働が行われる事前には、そのような協働が行われること自体が予測されていたわけではない。とりわけ学問の世界では常に知見が蓄えられているものの、蓄積されているそのときには、日の目を見る日のことは、あまり意識されていないのである。そのような意味では、目先の実践課題に捉われることなく、ある程度の余裕をもって様々な知見を蓄えておいたことが、何らかのきっかけによって事後的に使えることがわかるように

16. 鈴木雅明・加藤浩子 2002『バッハからの贈りもの』

17. 2012年10月31日 国立市 白十字 磯山雅インタビュー

18. 前3名は桐朋学園大学の同級生であり、寺神戸は彼らの4学年下の後輩である。

なったという現象であるといえる。

それを可能にしたのが、学問の世界の規範の独自性、すなわち、即時的な実践への転用ばかりを追求するのではなく、研究の進展に貢献することが重要視されることであった。学問の世界においては、多くの研究者は、実践に資するという意味での目的意識性よりも、自らの好奇心に駆り立てられて研究を行う。目先の目的意識のみに捉われていたのでは、演奏における大きな発展は望めなかったということであろう。学問的好奇心に駆り立てられた研究者が持っている知見を、どのようなことに使えるかわからないまま蓄積するということが学問の世界は行ってきたのである(沼上 1991)。

それ故に、ある時点で、音楽そのものが見直されるような大きな変化が起きた場合には、時代の要請に応じて、研究者から貴重な知見が引き出されたのである。このことは、学問の世界が自律的に、独自の規範に従って推移してきたからこそ可能となったといえる。蓄積された知見が、最終的に極めて重要な意味を持つのである。また、このような知見の蓄積が豊富且つ多様であればあるほど、環境変化に対して、より早く適切に反応することができるようになると考えられる。

このような知見の移転を可能にしたのは、BCJのような傑出した組織に、学問的な事柄にアクセスすることに苦手意識を持たない稀有な演奏家が存在したことである。BCJでは、よりよい演奏を指向するにあたり、ただ音を奏でるのではなく、学問的研究成果を演奏に取り入れる必要があることが認識されていたのである。その意味で、学究的な演奏家である鈴木雅明と彼を取り巻く演奏家たちは、理論と実践を自らの組織に同居させることに成功したといえる。

そして組織内で生成された高度な知見は、演奏という第一義的なアウトプットに加えて、彼らがポストを持つ音楽大学の教育の場や専門雑誌のインタビュー記事など言語化されたアウトプットという形で、他の演奏家や消費者のもとへ到達するのである。次節では、引き続き図1の流れに従い、理論と実践の協働が招いた最大の帰結である古楽市場の生成について述べる。

(2) 古楽市場の生成

カンタータの全曲演奏が、一部の消費者を古楽のファンへと変容せしめた要因とはいかなるものだったのだろうか。本節で述べられるのは、古楽を支持した音楽学者が雑誌記事などを通じて、BCJに如何なる評価を与えたか、さらに、古楽に興味を寄せた消費者の姿とはどのようなものか、という2点である。BCJのカンタータ全曲演奏に接した言論界の反応は、概して絶賛に近いものであった。以下はBCJによるバッハの教会カンタータ全集第1巻の録音(CD)に対する海外雑誌のディスク評である。

寺神戸とコーイの存在が全体のレベルを引き上げている—『グラモフォン』(英)

オーケストラは精気に満ち、ドイツ語の発音さえも正確だ—『ディアパゾン』(仏)

同じ日本の演奏家に比べはるかに表情が豊かで情熱的—『ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック』(仏)¹⁹

ここで注意せねばならないのは、これら海外雑誌の評価においては、藤井(1996)が指摘するように、「(クラシック音楽発祥の地でない)日本の演奏家がやったにしては」というような無言の但し書きの存在が否定できないことである。

しかしながら、200を超えるカンタータの全曲演奏という壮大な取り組みが日本人によってなされたことは、概ね好意的な驚きをもって迎えられたのである。とりわけ、我が国の音楽学者・評論家・批評家・ライターといった書き手たちが「日本人による初めての本格的なカンタータ演奏」という事実そのものに心を動かされたことは、想像に難くない。なお、BCJのカンタータ全曲演奏シリーズは、その後次々と各誌から賞を贈られている²⁰。次節では、絶賛に近い評価を目の当りにし、やがて古楽ファンとなつていった消費者の姿について述べる。

古楽ファンの姿

前述のように、バッハのカンタータは200曲以上にのぼり、録音という取り組みには長い時間を要する²¹。カンタータ全曲シリーズが完結するためには、順次リリースされて

19. 1996『レコード芸術』より、藤井留美「追跡レコード批評<154>鈴木雅明指揮バッハ・コレギウム・ジャパンによるJ・S・バッハ：教会カンタータ全集1」を参照

20. 例えば、「教会カンタータシリーズ」第23-26巻 2005年レコード・アカデミー賞(特別部門/企画制作)、同第24巻 仏、『ル・モンド・ドゥ・ラ・ムジク』誌 2004年年間ベスト10「ショック・オブ・ザ・イヤー」、同第22巻 仏、ディアパゾン金賞(03年)、「教会カンタータシリーズ」英BBC Music誌 創刊10周年記念特集(02年11月号)「過去10年間のトップ10ディスク」、同

第11,12巻 2000年レコード・アカデミー賞(声楽部門)日本ミュージックペンクラブ賞(最優秀アルバム邦人アーティスト)などがある。

21. BCJの場合、1995年に開始されたカンタータ全曲演奏は、2013年に完結する予定である。カンタータ全曲演奏を行った演奏家の大半は、録音活動に比較的長い時間を要したのであるが、その一方で、J. E. ガーディナーのように、約1年と短期に完結した演奏家も存在する。

いくCDを蒐集的に購入するようなファンを創出することが必要であったし、そのことが録音活動に継続性をもたらしたとみることもできよう。寺神戸によれば、寺神戸自身のファンには、不思議と医師が多いという。また、『古楽情報誌アントレ』編集部の品川幸子によれば、小売の販売経路が極めて限定的な『アントレ』では、購入手段の大半を定期購読が占め、その発送先としてとりわけ多いのは、医院や診療所、大学教員の研究室であるという。また、礒山は以下のように、バッハの音楽を理解するにあたり、何らかの知的な要素がみられることを認めている。

音楽自身が非常に知的なものだし、いわゆる感覚的な世界だけはすまない拡がりを持っていますからね。

バッハは我が国で最も有名な作曲家のひとりとして広く認知されているものの、すべての作品についてよく知られているわけではない。一般的な消費者によく知られているような一部の作品を除いてなお、1000曲を超える作品が存在する。それらの作品がいずれも消費者にとって魅力的なものであるならば、消費者がBCJの演奏を通じて、「バッハの深遠な世界」に惹きこまれていくことは十分に有り得よう。

要するに、バッハの音楽について最新の研究成果を踏まえた演奏を打ち出したことが、とりわけ知的な顧客セグメントの「バッハの音楽をもっとよく知りたい」というような知的な好奇心を喚起したという可能性が指摘できるのである。マタイ受難曲やヨハネ受難曲、口短調ミサといった宗教作品に比べて知名度が高いとはいえないカンタータをすべて演奏し得た要因について、寺神戸は以下のように語る。

ある意味日本だったからこそできたのではないかと思います。バッハの本質とはそれほど関係なくて、日本人の全集好きですよ。なにかというと全部集めるのが好きでしょう。例えば森鷗外全集やモリエール全集だとか。それぞれの好きな所において全集が好きなんです。だから音楽においてもバッハ「全部」というのが好きなんです。それに加えて日本人のマニアックな傾向。知的興味というのも日本人には多くあります。そういう要素をバッハはすべて満たしていて、知的興味や、「全部聴いたぞ」ということに凄く意欲を燃やしている人がたくさんいる。

アントレ編集部の品川は、BCJがファンを獲得できた要因という文脈で、顧客の姿について述べている。

BCJは質的にいいものを提供しているのと同時に、(BCJに) あれだけ会員がつくのは、日本人は全集物が好き(だから)です。ましてやバッハです。(日本人は) シリーズ物が好きですよ。「バッハのカンタータ全曲シリーズが1991年から始まりました」というような形で告知したら、先にカレンダーにつけて、「これ逃さないようにしよう」って。

いうまでもなく、日本の大半の消費者は意識的・無意識的であるに関わらず、バッハの音楽に親しんできた。BCJの演奏が多数の消費者に受け入れられた背景には、ここまでに述べたように、日本人のある種の特徴、すなわち(1) 蒐集を好む性質、及び(2) 本来的にバッハに親しみを持っているという性質の2点が深く関わっていると考えられるのである。以上概観してきた古楽市場の生成という現象は、BCJをはじめとする古楽演奏家たちが営々と取り組んできた活動の、ひとつの帰結である。

しかし、BCJの演奏に直に触れたことで影響を受けたのは、消費者だけではない。次節では、理論の世界の住人のアウトプットが変容した例を取り上げ、しかる後に、実践の世界の住人のアウトプットが変容した例を挙げる。もちろん、前者の後に後者について述べることは、本研究の便宜的事由のみによるものであり、単一の因果経路のみを表すものではない。後節で指摘するように、理論と実践のアウトプットが変化するのは、幾重もの相互作用を通じてのことである。

(3) アウトプットの変容

研究者のアウトプットの変容

研究者のアウトプットの変容における最も典型的な例としては、礒山2008「バッハ演奏の諸問題：演奏史を回顧しつつ」及び富田2008「バッハの自筆譜から我々は何を学べるか：演奏者と研究者の永遠の課題」を挙げることができる。これらについて注目すべき点は、長年にわたってバッハ研究の最前線で活躍している2名の学者が、いずれも自身の蓄積された知見を組み替えることで、演奏家にとって有益な情報を提供していることである。演奏家がよりよい演奏を行うために知っておくべきことと学者が既に持っている知見とが重なり合う領域について、学者が回顧的に知識を整理して、演奏家に提供するのである。富田はバッハの資料研究における世界的権威のひとりであり、自筆譜から受容史の諸段階にいたるまで、多方面に精通している研究者である。前述の文献は、礒山が設立した演奏団体「国立iBACHコレギウム」の演奏者を主な聴衆とした講演の資料として用いられたものである。このような意味での学問と実践の協働は、礒山らを中心に昨今

盛んに行われており、古楽演奏の発展及び顧客深耕・獲得の観点から大きな期待が寄せられている。

研究者として他の人が知らないようなことを極めている人と、実践家として秀でたひとがコラボレートすることが、現代では一番いい形であってね、具体的にイベントに対してコラボレートしてもいいけれども、影響し合うとか情報交換するというのだから、とてもいいと思うわけです。それは今行われているし、行わなければ、自己満足して演奏しているだけではだめだ、という風に皆が思うようになっていきますね²²。

演奏家のアウトプットの変容

音楽学研究と演奏実践の協働は、演奏家のアウトプットに対しても大きな影響を及ぼした。例えば、新バッハ全集²³という楽譜の出版には「巨大な研究が伴っている」²⁴。つまり、新バッハ全集が演奏にもたらした主たる貢献とは、高度に信頼に足る楽譜を演奏家に提供したこと、及びそのような楽譜が作られる背景としての、バッハの時代の様々な情報を明らかにしたことである。興味深いのは、研究によってわかってくることの面白さが演奏家に波及することである。例えば、バッハのフルート・ソナタにおける真贋問題は、「なぜこれが偽作なのか」という演奏家にとって極めて重大な問いを提起するものである。

たしかに、演奏家の関心は必ずしも研究者が行う研究の中身すべてではないものの、演奏家と研究者の双方が興味を持って扱わざるを得ない接点がある。バッハの場合には特に多く存在する。演奏家がこうした問題に興味を持つ背景としては、演奏家が本能的に持っている、よりよい演奏の追求というモチベーションを指摘せざるを得ない。そしてこの種の動機は知識欲を呼び起こすのである。バッハが生きた時代の宗教的・社会的な状況などについて理解を深めることが、より深くカンタータを理解することに繋がるわけである。そうした学びを始めると、演奏家は「病みつき」になっていく²⁵。寺神戸は以下のように述べる。

(バッハを探求することは)宝探してみたいなものです。その宝が実際にあるのが面白いわけです。だから頑張って探していれば見つかるだろうとみんなが思って実際に見つけてきた。そういうことをした結果が成果となって、それだけより強く聴衆に語っていくよさだという実感が得られる²⁶。

こうした演奏家の知識欲というニーズに対して、20世紀のバッハ研究は結果を出し続けてきたのである。また、楽譜や論文などの文献を通じてのみならず、研究者に直接教養を請い、それによって演奏家の目がひらかれたことも指摘できる。このように、2つの世界の住人の相互作用が、やがて互いのアウトプットを変容せしめる可能性について、磯山は以下のように述べている。

研究をしている人がいると、そういう人の話を聴こうということになってきて、それによって、目をひらかれるってというのは有り得ますね。同時に、研究者の方が演奏者の非常に高度な演奏によっていろんなことを教えられるようなことと、どちらが多いか少ないかは別としても、有り得るということですよ²⁷。

IV. 考察

事例研究から示唆されるのは、新しい製品を生産・提供するという行為の正当性が、実務家と理論家という異質な両世界の間の相互作用を通じて獲得されている点である。この知見は、正当性の構築という概念に再考を促すことを意味する。なぜならば、例えば本事例のように、価値評価が主観に強く依存するような製品の市場では、当該製品の正当性は、相互行為によって製品の補足的な情報がどのように創られ、語られるかに依存している。そして、その情報の創られ方・語られ方は、相互行為の相手の異質性や相互行為の状況・タイミングに依存しているのである。提起できるのは、この種の製品市場における、正

22. 2012年10月31日 国立市 白十字 磯山雅インタビュー

23. 角倉(2000)は、『新バッハ全集』刊行を「今世紀後半における最大の業績」と評価している。ゲッティンゲンのバッハ研究所とライブツィヒのバッハ・アルヒーフにより1954年から刊行が始まったこのバッハ新全集は、現存するあらゆる原典資料を精査し直して、最も信頼すべきバッハの楽譜を提供してきた。その全容はカンタータ41巻、ミサ曲・受難曲・オラトリオ9巻、モテット・コラール3巻、オルガン曲9巻、クラヴィーア・リュート曲12巻、室内楽5巻、オーケストラ曲7巻、カノンその他2巻から成る本体全88巻に加えて、紙の透かし模様、自筆譜集、コピスト、訂正・追補、索引の各巻からなる付録5、補巻5という壮大な規模を誇っている。当初は15年計画で始まったものの、資料の調査と校訂の仕事にははるかに多くの時間

を要し、刊行開始から53年を経た2007年に、ようやく刊行を完了した。この新全集の意義は信頼すべきバッハの楽譜を提供したにとどまらない。原典資料を再検討する過程で、資料批判の厳密な方法論を確立したのみならず、作品の成立年代その他についても画期的な研究結果を生むことになったからである(角倉 2000)。

24. 2012年10月31日 国立市 白十字 磯山雅インタビュー

25. 2012年11月9日 文京区 東京ドームホテル 寺神戸亮インタビュー

26. 2012年11月9日 文京区 東京ドームホテル 寺神戸亮インタビュー

27. 2012年10月31日 国立市 白十字 磯山雅インタビュー

当性の獲得を捉えるには、業界関係者の複雑な相互作用に目配りすることが重要だという点である。市場に投入された製品については、その良し悪しをめぐる信念が業界関係者や消費者の間で形成されていく。とりわけ、例えばモダン演奏のように市場に長らく存続してきた製品は、古楽のように市場に投入されてから間もない製品と比較すると、ファンや評価形成者が強固な信念を共有していることが想定される。従って、過去との一貫性が欠如した新しい製品が市場に投入されると、批判を招くことになりかねない。しかも音楽という製品の価値判断は、スペックよりも受け手の感性や主観に強く依存する性質を持つ、感性指向型製品²⁸である(庄司 1997)。ある演奏家や演奏の評価が一度消費者や評価形成者の心の中に定着すると、その評価を改めさせることが極めて難しいタイプの製品であるといえよう。

従って製品、とりわけ感性指向型製品の需要創出を検討するにあたっては、企業が訴求したい製品の正当性が、当該分野の専門家や研究者といった、関係主体でありながら異質でもある社会的世界の住人との対話によって吟味され、洗練されることで、やがて共有されることが重要となる。単に消費者が抱く態度を把握することのみに注力しては、自社の対市場行動に対するポジティブ/ネガティブな議論が展開されるプロセスを理解することは不可能である。自社の製品に対して消費者が正当性を見出すよう、有効な戦略が採れないばかりか、味方にすべきプレーヤーからも批判を招くという事態に陥る可能性がある(大竹 2012)。

さらに、そうした製品の需要創出を目指すには、正当性構築の担い手の異質性に目配りする必要がある。なぜならば、当事者と同質的あるいは類似の社会的世界から、正当性を鍛え上げるに足る知見が流れてくることは、あまり期待できないからである。異質な社会的世界を形成している研究者や評論家、サプライヤー、その他取引先といった関係主体との緊密な協働が考慮されなければ、正当性の構築は覚束ないだろう。

実践的含意及び今後さらなる経験的研究を進める上での課題

感性指向型製品の市場における消費者の購買意思決定を適切に援助するためには、業界関係者、とりわけ理論家と実務家の複雑な相互作用に目配りを行うことが重要である。異質な複数の社会的世界が協働することは、新商品の正当性が構築される契機となる。本事例におけ

る古楽演奏家という実務家はつまり、作品という「過去の遺産」を解釈し、再創造する主体であり、音楽学研究者という理論家は、そのような解釈・再創造を行うためのリソースを提供すると同時に、完成品の評価を形成する主体である。このように一般化すれば、例えば時間芸術・空間芸術、その他各種エンタテインメント、ファッション、建築、フード、観光など、「過去の遺産」を最終製品の主たる資源とし、且つその製品の価値が評価者の主観に強く依存するような性質をもった産業においては、解釈・再創造の成否を握るのは、異質な社会的世界との相互行為による正当性の構築にある、とみることができる。

今後の経験的研究の方向性としては、競合企業間で保持している技術が同質的で、かつ製品の評価が一般的な消費者には困難であるが故に、消費者の意思決定を助ける専門家が重要な影響力をもつような事例を詳細に比較することを通じて、製品の正当性が構築される過程の諸相、及び正当性構築を意図した行動の結果に対する消費者の認識や態度が、彼らを取り巻く状況の変化によっていかに変容するか、といった点が明らかにされるべきである。その際にとりわけ着目すべきは、当事者のものの見方やそれに大きな影響を及ぼす環境の変化である。それらに目配りし、当事者や消費者が見出す正当性、さらには複数の社会的世界が交差する様相について検討するのである。

企業と消費者にのみ着目し、企業と異質な社会的世界との関係を捨象した市場創造という見方ではなく、「正当性の社会的構築」という、企業を含めた複数の主体の影響関係を十分に考慮しながら市場の創造過程を分析することは、意義深い研究であるように思われる。

参考文献

- アーノンクール、ニコラウス(那須田務・本多優之訳)(2006)『音楽は対話である モンテヴェルディ、バッハ、モーツァルトを巡る考察』アカデミア・ミュージック
- アントレ編集部『古楽情報誌アントレ』0-244号
- 磯山雅(2008)「バッハ演奏の諸問題：演奏史を回顧しつつ」『国立音楽大学音楽研究所年報』第21号, 139-145
- 大竹光寿(2012)「ブランド構築の物語—ハーレーダビッドソンをめぐる正統性の探究—」博士論文
- 木村真琴(2008)「代理消費者起用に関する制度分析—化粧品事業における美容ジャーナリストの台頭—」博士論文

28. 製品の価値評価が、スペックではなく受容者の主観や趣味に強く依存するような製品をいう。例えば、音楽を含めた各種エ

ンタテインメントやインテリア、衣服、建築などが挙げられる(庄司、月尾 1995)

- 佐藤郁哉・山田真茂留(2004)『制度と文化 組織を動かす見えない力』日本経済新聞出版社
- 庄司裕子(1997)「感性指向製品の選択過程における他者の役割」『情報処理学会研究報告. [グループウェア] 第23号, 31-36
- 庄司裕子・月尾嘉男(1995)「感性指向製品の消費者行動における他者との相互作用の役割」『情報処理学会研究報告. [情報メディア] 第1号, 19-26
- 鈴木雅明(2004)『わが魂の安息、おおバッハよ!』音楽之友社
- 鈴木雅明・加藤浩子(2002)「バッハからの贈りもの」春秋社
- 角倉一朗(2000)「20世紀のバッハ研究」『東京藝術大学音楽学部紀要』第25号, 47-65
- 長清子(1973)「民芸美の発見と柳宗悦——無銘の李朝陶磁器に触発されて——」『アジア文化研究』第7号, 173-195
- 寺西肇(2000)『古楽は私たちに何を聴かせるのか』東京書籍
- 富田庸(2008)「バッハの自筆譜から我々は何を学べるか：演奏者と研究者の永遠の課題」『国立音楽大学音楽研究所年報』第21号, 159-174
- 日本リコーダー協会(1966-1985)『リコーダー』(日本リコーダー協会)
- 沼上幹(1991)「科学と技術の同型化：液晶科学の事例分析」『一橋論叢』第106号, 511-528
- 沼上幹(2000)『行為の経営学—経営学における意図せざる結果の探究—』白桃書房
- ハスケル, ハリー (有村祐輔訳) (1992)『古楽の復活』東京書籍
- 藤井留美(1996)「追跡レコード批評<154>鈴木雅明指揮バッハ・コレギウム・ジャパンによるJ・S・バッハ：教会カンタータ全集1」『レコード芸術』第45巻11号, 286-289
- メルトル, モーニカ・トゥルコヴィッチ, ミラン(臼井伸二・蔵原順子・石川桂子訳) (2006)『アーノンクールとコンツェントゥス・ムジクス』アルファベータ
- ロジャーズ, エベレット(三藤利雄訳) (2007)『イノベーションの普及』翔泳社
- DiMaggio, Paul. J. 1986. "Cultural Entrepreneurship in Nineteenth-Century Boston," *In DiMaggio, P. J. ed. Nonprofit Enterprise of the Arts*. Oxford University Press.
- Eisenhardt, Kathleen. M. 1989, "Building Theories from Case-Study Research," *Academy of Management Review*, 14(4): 532-550.
- Humphreys, A. (2010). Megamarketing: The Creation of Markets as a Social Process. *Journal Of Marketing*, 74(2), 1-19.
- Johnson, C., Dowd, T. J., Ridgeway, C. L., Cook, K. S., & Massey, D. S. (2006). Legitimacy as a Social Process. *Annual Review Of Sociology*, 32(1), 53-78.
- Kotler, P. (2007). *Marketing Management*. Bloomsbury Business Library - Management Library, 58.
- Peterson, Richard. A. and Berger, David. G. 1996. "Cycles in Symbol Production: The Case of Popular Music," *American Sociological Review*, 40(2): 158-173.
- Peterson, Richard. A., and Anand, N. N. 2004. "The Production of Culture Perspective," *Annual Review Of Sociology*, 30(1): 311-334.
- Strang, David. and Meyer, John. W. 1993. "Institutional Conditions for Diffusion." *Theory and Society* 22: 487-511.
- Suchman, M. C. (1995). Managing Legitimacy: Strategic and Institutional Approaches. *Academy Of Management Review*, 20(3), 571-610.

インタビューにご協力頂いた方々

[バッハ・コレギウム・ジャパン]

鈴木雅明 創設者・音楽監督
鈴木秀美 首席チェロ奏者
寺神戸亮 コンサートマスター

[音楽学]

磯山雅 国立音楽大学招聘教授(音楽学)
前・日本音楽学会会長
広瀬大介 青山学院大学准教授(音楽学)

[モダン演奏家]

大杉那々子 ヴァイオリニスト
高橋洋太 東京都交響楽団 コントラバス奏者
永澤葉若 東京フィルハーモニー交響楽団
ヴァイオリン奏者

西村絵里子 東京藝術大学教育研究助手 チェリスト
横溝耕一 NHK交響楽団 ヴァイオリン奏者

オヤマダアツシ 音楽ライター
品川幸子 古楽情報誌「アントレ」編集部

1からシリーズ



1からの流通論
石原武政・竹村正明 (編著)



1からのマーケティング
(第3版)
石井淳蔵・廣田章光 (編著)



1からの戦略論
嶋口充輝・内田和成・
黒岩健一郎 (編著)



1からの会計
谷武幸・桜井久勝 (編著)



1からの観光
高橋一夫・大津正和・
吉田順一 (編著)



1からのサービス経営
伊藤宗彦・高室裕史 (編著)



1からの経済学
中谷武・中村保 (編著)



1からのマーケティング分析
恩蔵直人・富田健司 (編著)



1からの商品企画
西川英彦・廣田章光 (編著)



1からの経営学 (第2版)
加護野忠男・吉村典久
(編著)



1からのファイナンス
榊原茂樹・岡田克彦 (編著)



1からのリテール・マネジメント
清水信年・坂田隆文 (編著)



1からの病院経営
木村憲洋・的場匡亮・
川上智子 (編著)



1からの経営史
宮本又郎・岡部桂史・
平野恭平 (編著)

碩学叢書



マーケティング
クリエイティブ (1巻)
石井淳蔵・大西潔 (編著)



病院組織のマネジメント
猶本良夫・水越康介 (編著)



百貨店の
ビジネスシステム変革
新井田剛 (著)



国際マーケティング
小田部正明、K・ヘルセン (著)
栗木契 (監訳)



メガブランド
張智利 (著)



[新訳] 事業の定義
アレク・F・エーベル (著)
石井淳蔵 (訳)



セールスインタラクション
田村直樹 (著)



ことばとマーケティング
松井剛 (著)



新しい公共・
非営利のマーケティング
水越康介・藤田健 (編著)



企業変革における
情報システムの
マネジメント
依田祐一 (著)



よみがえる商店街
畢滔滔 (著)

碩学舎ビジネス双書



商業・まちづくり口辞苑
石原武政 (著)



ビジョナリー・
マーケティング
栗木契・岩田弘三・
矢崎和彦 (編著)



旅行業の扉
高橋一夫 (編著)



コトラー8つの成長戦略
フィリップ・コトラー/
ミルトン・コトラー (著)
嶋口充輝、竹村正明 (監訳)



寄り添う力
石井淳蔵 (著)



グローバル・
ブランディング
松浦祥子 (編著)



新刊
医療現場のプロジェクト
マネジメント
猶本良夫・永池京子・
能登原伸二 (編著)



近刊 (2014年8月30日刊行予定)
愛される会社のつくり方
横田浩一・石井淳蔵 (著)

SBJ 碩学舎ビジネス・ジャーナル

<http://www.sekigakusha.com/sbj/>



vol.1
商業を捉える論理
石原武政・水越康介・西川英彦



vol.2
「創造的瞬間」とは何か？
石井淳蔵・水越康介・西川英彦



vol.3
マーケティングの論理
嶋口充輝・水越康介・西川英彦



vol.4
事業の定義復刊の意義
石井淳蔵



vol.5
欲望とは何か
田中洋・水越康介・西川英彦



vol.6
データをマッサージする
中西正雄・川上智子・石淵順也



vol.7
日本の管理会計：
「数字へのこだわり」とインターアクション
が創造性を生み出す
谷武幸・窪田祐一・廣田章光



vol.8
碩学アーカイブ 石原武政-1
石原武政



vol.9
碩学アーカイブ 石原武政-2
石原武政



vol.10
碩学アーカイブ 石原武政-3
石原武政



vol.11
日本のコーポレート・
ガバナンスを問う
加護野忠男・山田幸三・吉村典久



vol.12
碩学アーカイブ 石原武政-4
石原武政



vol.13
『1からの病院経営』
刊行にあたって
木村憲洋・的場匡亮・川上智子



vol.14
『セールスインタラクション』の
刊行にあたって
：営業が生み出す消費欲望とは？
松井剛



vol.15
碩学アーカイブ 石原武政-5
石原武政



vol.16
『新しい公共・非営利のマーケティング』
の刊行にあたって
水越康介・藤田健



vol.17
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「日本企業の多角化と企業価値に
関するパネルデータ分析」
池田雄哉



vol.18
第1回碩学舎賞奨励賞受賞作
「後発企業のネットワーク戦略
-北海道におけるワイン・クラスターの
競争逆転-」
長村知幸



vol.19
碩学アーカイブ 石原武政-6
石原武政



vol.20
消費者行動研究と戦略論をつなぐ
和田充夫・新倉貴士・水越康介



vol.21
最終講義
「マーケティングと消費者行動」
池尾恭一



vol.22
1からの経営学部
伊藤貴晃・岸本のぞみ・久野恵理子
(法政大学経営学部 西川英彦ゼミ
チームローニーズ)



vol.23
『よみがえる商店街
：アメリカ・サンフランシスコ市の経験』
刊行にあたって
畢滔滔



vol.24
『寄り添う力
：マーケティングをプラグマティズムの視点から』
刊行にあたって
石井淳蔵



vol.25
1からの学生生活
坂田葉・上田将迪・中野海地
(関西学院大学 石淵順也ゼミ
チームSUN)



vol.26
1からの学生生活
松原悠・佐藤あゆみ・井上恵夢
(一橋大学 松井剛ゼミ)



vol.27
第2回碩学舎賞一席
「デザインと技術：製品の意味の革新に対する技術の貢献」
後藤智



vol.28
第2回碩学舎賞二席
「既存事業の成長と顧客資源の活用」
渡辺紗理菜



vol.29
第2回碩学舎賞二席
「『古楽』市場の生成過程における
音楽学研究と演奏実践の協働」
飯島聡太郎

SBJ-碩学舎ビジネス・ジャーナル- vol.29 (2014年8月22日発行)

第2回碩学舎賞 二席

「『古楽』市場の生成過程における音楽学研究と演奏実践の協働」

飯島 聡太朗(一橋大学大学院 商学研究科)

Online edition : ISSN 2187-0845

碩学舎の会員になりませんか？

碩学舎の教員会員ページでは、大学・専門学校の教員の方へ向けて「1からシリーズテキスト」を使った講義に役立つ資料や情報をお届けしています。

※教員会員ページにはログインが必要です。教員会員資格は、大学・専門学校の教員および博士課程の大学院生の方に限ります。

株式会社 碩学舎
Sekigakusha

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町2-1 木村ビル10F
フリーダイヤル 0120-778-079

碩学舎公式サイト
<http://www.sekigakusha.com>
Facebook
<https://www.facebook.com/sekigakusha>